

ハッピーたん生

龍郷町立田小学校 三年 徳重 隆成

「あれ、こんなところにたまごが……。」

奄美の森を歩いていたらうりぼうのウリウリは、かわいい白いたまごを見つけた。

「ううん、一体何のたまごだろう。」

つついたり転がしたりして、しばらく様子を見ていたが、まだ生まれる気配はない。

「よし。ぼくがあつためてやる。」

ウリウリは、たまごを家に持ち帰り、一ばん中大切にあつためた。

「ぼくも、お母さんにいつもこんなふうにあつためてもらっているんだよね。お母さん。」

「そうよ、ウリウリ。大切なウリウリがかぜをひかないように、お母さんは毎ばんあつためているのよ。こうやってね。」

そう言ってお母さんイノシシは、ウリウリをやさしく温かく包みこんだ。そのうでの中で、ウリウリはしあわせな気持ちでたまごをやさしく包みこみ、ねむりについた。次の日、ウリウリはたまごを持ってさん歩に出かけた。歩いているとアカシヨウビンのクツカルが空から声をか

けてきた。

「やあ、ウリウリ。何を大事そうに持っているんだい。」

「たまごだよ。でも、何のたまごか分からなくて……。」

夕べはぼくがあつためてあげたんだ。」

そう言つて、ウリウリはたまごを見せた。

「ううん。おれにも分からないなあ。でも、たまごから何が生まれるのか見てみたいな。ウリウリ、今日、ウリウリの家にとまりに行つてもいいかい。」

「もちろんだよ。」

その日のばん、ウリウリの家に行つたクツカルは、ウリウリと一しょにたまごをやさしく包みこんでねた。

「何だか、お母さんになった気分だな。たまごから赤んぼうが出てきたとき、おれをお母さんだと思わないかな。」

「あつ、それだったら、ぼくが先にあつためたんだから、ぼくがお母さんだよ。」

二人はそんな会話をしながら、幸せな気持ちでねむりについた。その様子を見ていたお母さんイノシシも何だか心があつたかくなつた。

その次の日、ウリウリとクツカルは、もちろんたまごを持ってさん歩に出かけた。と中でアマミノクロウサギの黒ちゃんに会った。

「こんにちは、ウリウリとクツカル。ねえ、その大事そ

うに持っているものは何。」

「たまごだよ。でも、何のたまごか分からなくて……。

夕べはぼくとクツカルがあつたためあげたんだ。」

そう言つて、ウリウリはたまごを見せた。

「ううん。わたしにも分からないわ。でも、たまごから何が生まれるのか見てみたいわ。ねえウリウリ、今日、ウリウリの家にとまりに行つてもいいかしら。」

「もちろんだよ。」

その日のばん、ウリウリの家に行つた黒ちゃんは、ウリウリとクツカルと一しよにたまごをやさしく包みこんでねた。

「何だか、お母さんになつた気分だわ。たまごから赤ちゃんと出てきたとき、わたしをお母さんだと思わないかしら。ねえ、赤ちゃんが生まれたらわたしが名前をつけてもいいかしら。」

黒ちゃんが言い終わらないうちに、

「だめ。ぼくが名前をつけるに決まつてるよ。」

「何言ってるんだい。おれだつてウリウリにまけないくらい、やさしくあつたためたんだぞ。だから、おれがお母さんになつて、名前をつけるのさ。」

三人はそんな会話をしながら、幸せな気持ちになつてねむりについた。その様子を見ていたお母さんイノシシも、早く赤ちゃんの顔が見たくて、たまごをそつとなでてみ

た。

「みんなが楽しみに待つているわよ。」

お母さんイノシシは笑顔でつぶやいた。

夜が明け始めたころ、たまごはピキピキと音をたてわれ始めた。その音に気づいた三人は、とび起きて、どきどきしながらたまごを見つめた。赤ちゃんは、外に出ようと一生けんめい。

「よいしょ、よいしょ。」

と力をふりしぼつて「から」に体当たり。

「がんばれ、がんばれ、もう少し。」

三人も手に力を入れておうえんした。

ようやくみんなの前にすがたをあらわした赤ちゃんは、なんと、みんながおそれるハブだった。三人はびつくりしたけれど、

「みんな、ありがとう。ぼくが生まれたのはみんなのおかげ。おん返しに、やさしいみんながいるこの奄美の森を、いつまでも大切にまもるよ。約そくする。」

そう言われて、赤ちゃんたん生をよろこんだ。

今の奄美の森が緑豊かなのも、動物たちが安心してくらしているのも、きつとこのハブのハッピーが、奄美の森に住むすべての命をやさしく包みこんでいるからかもしれないね。